

人が酒を飲む理由は大きく分けるに二つあります。一つは「コミュニケーションをとるため。もう一つは自分を解放するため。百薬の長とも呼ばれる酒を飲むことは、心や体からの欲求で、適度な飲酒は決して毒ではありません。自動運転が普及で、もしない限り、飲酒運転の根絶は至難の業だと思えます。なぜなら酒の「薬」の部分が効果を発揮すればするほど「毒」の部分も顕著出し、そのバランスをとるのは難しいからです。酒は肝臓毒であり、神経毒でもあります。飲み過ぎは肝臓などを傷め、脳に影響します。酒の効用で精神の解放されてリラックスするにつれ、脳の機能は低下し、判断力が落ちます。気がちが解放されると、自己中心的な欲求は高まります。しらふの時は「酒を飲んだら運転してはいけない」と判断していた脳が

依存症治療 周囲が協力

精神科医 山家 研司さん



やんべ・けんじ 帯広市生まれ。旭山病院院長。札幌医科大学後、民間病院、国際大、道立精神保健福祉センターなどの勤務を経て現職。30年以上にわたるアルコール依存症患者の治療と社会復帰支援に携わる。68歳。

「薬だから運転して帰っちゃえ」といった欲求に負けてしまっています。では飲酒運転を防ぐにはどうしたらいいのか。医学的見地から答えれば、「事前に手を打っておく」か「周囲が防げないか」と思っています。飲酒する時は、車を出かけない。でも急な誘いで酒席に入ると、

万人、予備軍は約200万人とされています。子どもなどを除くと、20〜30人に1人は依存症か予備軍となります。依存症の人は飲酒に対する自己コントロール能力が低下しています。TPO（時・場所・事情）を踏まえた酒の飲み方ができず、飲酒運転のリスクは大きくなります。精神科などでの治療が必要ですが、日本では抵抗感が強いのです。かつて「アルコール中毒」と呼ばれていた影響もあり、本人はもとより、家族など周囲も認めがたがらな。依存症の発見、治療には周囲の協力が必須です。健康診断での肝機能の数値の悪化や異常な飲み方に気づいたら、ぜひ受診させてください。大切な人の心と体を守るのと同じに、多くの人を危険にさらす飲酒運転を未然に防ぐべきな一歩にもなるはずです。

環境を作ること、誤った行動を引き起こす人を周囲の協力など社会全体で受け止めること——。地道な取り組みを続けることが、いつか飲酒運転ゼロの社会につながるかと信じている。（長谷川嗣）

飲酒運転 根絶するには



飲酒運転根絶条例が今月から施行された。昨年は小樽市で女性4人が死傷するひき逃げ事件が起き、今年も砂川市で暴走車によって5人が死傷するなど、道内で飲酒運転による悲劇が後を絶たない。なぜ飲酒運転はなくなるのか。根絶のために何をすべきなのか。法制度の研究者と、アルコール問題に詳しい医師に聞いた。

道条例 全会一致で成立

道議会の全会派が共同提案し、11月26日に成立した。基本理念として「飲酒運転をしない、させない、許さない」「道、市町村、道民、事業者が協働し、社会全体で取り組む」ことを掲げる。

道民は飲酒運転をしないだけでなく、飲酒運転を見つけた場合に制止・通報するよう努める義務がある。飲食店は啓発文書を掲示し、タクシー業者は広報活動をするなどの努力義務も課した。

飲酒運転の予防と再発防止のため、道はアルコール依存症の人と家族に対する相談支援などにも取り組む。飲酒運転をした人には、保健所でアルコール依存症に関する指導を受けるよう促す。

小樽市で女性4人が死傷した飲酒ひき逃げ事件が起きた7月13日を「飲酒運転根絶の日」と定めている。

は言葉を失った。人を傷つけ、すべてを失ってしまうこともわかっているのに、なぜ人は飲酒運転をしてしまうのか。その理由と根絶方法を知りたくて専門家に聞いたが、やはり答えは

飲酒運転をする人は、主に三つのタイプがあります。まず、アルコールに対する正しい知識がなく、運転への影響を軽視してしまう人。2番目は、アルコール依存症の人とその予備軍。3番目は、法やルールを順守する意識がそもそも欠けていたり、希薄だったりする人です。

道の飲酒運転根絶条例には罰則規定がありませんが、特にアルコール依存症の人に対しては、罰則はあまり効果を期待できません。警察官や教員のような、検査されれば重い社会的制裁を受けると分かっている立場の人でさえ飲酒運転が相次ぐ原因の一つに、アルコール依存症があると願います。

罰則を定めた福岡県の条例でも適用例はわずかです。「処罰を目的として」という基本方針のもとで、抑制的に運用されているようです。

社会問題として予防を

愛媛大准教授 小佐井 良太さん



「はい、いいえ、た。熊本市生まれ。九州大学臨床心理学専攻。専門は法社会学。飲酒をひきこむ事件、事故を、主に捜査からの聞き取りと裁判の傍聴を通じて調査し、法制度上の問題を研究している。福岡県の飲酒運転根絶条例の制定と改正にもかかわった。48歳。

飲酒運転は個人の処罰で済ませるのではなく、社会全体の問題としてとらえ、予防することが重要です。

昨年9月まで約9カ月間、愛州のシドニー大学で飲酒運転対策を研究しました。ある州では交通違反者に8週間程度のプログラムを実施し、アルコール・薬物依存症治療の

専門家や、高速度路の事故処理をするのが、社会全体の問題としてとらえ、予防することが重要です。昨年9月まで約9カ月間、愛州のシドニー大学で飲酒運転対策を研究しました。ある州では交通違反者に8週間程度のプログラムを実施し、アルコール・薬物依存症治療の

みでなされて幸運だ」と語っていました。こうしたプログラムを日本でも実施するべきだと願っています。職場単位での啓発や、飲酒運転の検査者にアルコール依存症かどうかの受診・診断を義務づけることは意味があります。教育も重要です。子どもたちの成長段階に応じて、学校でアルコールについて基礎知識と交通ルールを教えるらうでしょうか。

7月、砂川市で現職市議が飲酒運転の疑いで逮捕された。同市では前月、飲酒運転による暴走行為に巻き込まれ、家族5人が死傷していた。飲酒運転の撲滅を訴えていた市議会メンバーの信じ難い行動に、地元

飲酒運転に気付いても制止・通報をするかどうか、ためらう人もいます。知人同士だったり、飲食店と客の関係だったりするとなおさらでしょう。「いいえ、いいえ、いいえ、許さないとどうも理合を掲げた条例ができたこと、一歩踏み込んで行動を取れる仕組みが、社会を変えていく契機になります。」

記者の視点